

日蓮大聖人御書全集

みようほうまんだらくようじ

妙法曼陀羅供養事

新版
1726
ゝ
1728

みようほうまんだらくようじ
妙法曼陀羅供養事

ぶんえい ねん
文永10年('73)

さい
52歳

せんにちあま
(千日尼)

みようほうれんげきよう ごほんぞん くようそうら
妙法蓮華經の御本尊、供養候いぬ。

まんだら もんじ ごじしちじ そうら

この曼陀羅は、文字は五字七字にて候えども、三世の諸仏

おんし いっさい によん じようぶつ いんもん めいど

灯

の御師、一切の女人の成仏の印文なり。冥途にはともしびと

しで やま りようば てん にちがつ

なり、死出の山にては良馬となり、天には日月のごとし、地

しゅみせん しょうじかい ふね じようぶつとくどう どうし

には須弥山のごとし。生死海の船なり、成仏得道の導師な

だいまんだら ほとけ めつごにせんにひやくにじゅう よねん あいだ

り。この大曼陀羅は、仏の滅後二千二百二十余年の間、

いちえんぶだい うち 広 たま

一閻浮提の内にはいまだひろまらせ給わず。

やまい

くすり

きょうびよう

ぼんやく

施

じゅうびよう

病によりて薬あり。軽病には凡薬をほどこし、重病

せんやく

与

ほとけ

めつご

いま

には仙薬をあたうべし。仏の滅後より今までは

にせんにひやくにじゅうよねん

あいだ

ひと

ぼんのう

さいごう

やまいかる

二千二百二十余年の間は、人の煩惱と罪業の病軽かりし

ちしや

もう

くすし

続

い

たま

やまい

したが

かば、智者と申す医師たちつづき出でさせ給いて、病に随

くすり

与

たま

くしやしゅう

じょうじつしゅう

つて薬をあたえ給いき。いわゆる俱舍宗・成実宗・

りつしゅう

ほつそうしゅう

さんろんしゅう

しんごんしゅう

けごんしゅう

てんだいしゅう

律宗・法相宗・三論宗・真言宗・華嚴宗・天台宗・

じょうどしゅう

ぜんしゅうとう

か

しゅうじゅう

いちいち

くすり

浄土宗・禅宗等なり。彼の宗々に一々に薬あり。いわ

けごん

ろくそう

じゅうげん

さんろん

はつぷちゅうどう

ほつそう

ゆいしきかん

ゆる、華嚴の六相・十玄、三論の八不中道、法相の唯識観、

りつしゅう

にひやくごじっかい

じょうどしゅう

みだ

みようごう

ぜんしゅう

けんしょう

律宗の二百五十戒、浄土宗の弥陀の名号、禅宗の見性

じようぶつ しんこんしゆう ごりんかん てんだいしゆう いちねんさんぜんとう
成仏、真言宗の五輪観、天台宗の一念三千等なり。

いま よ すで まっぼう 臨 しょうゆう き うえ

今の世は、既に末法にのぞみて諸宗の機にあらざる上、

にほんこくいちどう いっせんたい だいほうぼう もの もの たと

日本国一同に一闡提・大謗法の者となる。また物に譬うれ

ふぼ ころ つみ むほん 起 とが すいぶつしんけつとう じゅうざい

ば、父母を殺す罪、謀叛をおこせる科、出仏身血等の重罪

とう す さんぜんたいせんせかい いっさいしゅじょう ひと まなこ 抜

等にも過ぎたり。三千大千世界の一切衆生の人の眼をぬ

つみ ふか じっぼうせかい どうとう や 払

ける罪よりも深く、十方世界の堂塔を焼きはらえるよりも

こ たいざい いちにん つく ほど しゅじょう にほんこく じゅうまん

超えたる大罪を一人して作れる程の衆生、日本国に充満

せり。

てん ひび まなこ 怒 にほんこく 睨

されば、天は日々に眼をいからして日本国をにらみ、

ちじん いかな な じじ み 震

地神は忿りを作して時々^わに身をふるうなり。しかるに、我が

ちよう いっさいしゅじよう みな わ み とが おも かなら

朝の一切衆生は、皆「我が身に科なし」と思い、「必ず

おうじよう じようぶつ 遂 おも かつかく にちりん

往生すべし、成仏をとげん」と思えり。赫々たる日輪を

めな もの み し たと 太鼓

も、目無き者は見ず知らず。譬え^たば、たいこのごとくなる

じしん 眠 もの こころ 覚 にほんこく いっさい

地震をも、ねぶれる者の心にはおぼえず。日本国の一切

しゅじよう

衆生もかくのごとし。

によにん なんし とが 多 なんし あま 科 おも

女人よりも男子の科はおおく、男子よりも尼のとがは重

あま そう とが はかい そう じかい ほつし

し。尼よりも僧の科はおおく、破戒の僧よりも持戒の法師の

科 おも じかい そう ちしや とが 重

とがは重し。持戒の僧よりも智者の科はおもかるべし。こ

れらは、癩病の中の白癩病、白癩病の中の大白癩病なり。
らいびよう なか びやくらいびよう びやくらいびよう だいびやくらいびよう

まつだい いっさいしゅじよう

末代の一切衆生は、いかなる大医、いかなる良薬をもつ

じ

勘

そうら

だいにちによらい

ちけんいん

てか治すべきとかんがえ候えば、大日如来の智拳印ならび

だいにち

しんごん

あみ

だによらい

しじゅうはちがん

やくしによらい

じゅうにだいがん

に大日の真言、阿弥陀如来の四十八願、薬師如来の十二大願

しゅびようしつじよ

ちか

およ

くすり

使

やまい

の衆病悉除の誓いも及ぶべからず。この薬つかわば、病

しょうめつ

うえ

ばいぞう

まつぼう

とき

消滅せざる上、いよいよ倍增すべし。これらの末法の時の

きようしゅしゃくそん

たほうによらい

じつぼうふんじん

しよぶつ

あつ

ために、教主釈尊、多宝如来・十方分身の諸仏を集めさ

たま

ひと

せんやく

留

たま

せ給いて、一つの仙薬をとどめ給えり。いわゆる

みようほうれんげきよう いつ もんじ

妙法蓮華經の五つの文字なり。

もんじ

この文字をば、ほうえ 法慧・くどくりん 功德林・こんごうさった 金剛薩埵・ふげん 普賢・もんじゆ 文殊・やく 藥

おう 王・かんのんとう 観音等にもあつらえさせ給わず。

詔

たま

かしよう

いかにいわんや迦葉・

しやりほつとう

じようぎようぼさつとう

もう

しにん

だいぼさつ

舍利弗等をや。上行菩薩等と申して四人の大菩薩ましま

ぼさつ

しやかによろい

ごひやくじんてんごう

みでし

す。この菩薩は、釈迦如来、五百塵点劫よりこのかた御弟子

たま

いちねん

ほとけ

忘

だいぼさつ

め

とならせ給いて一念も仏をわすれずまします大菩薩を召

い

さず

たま

し出だして授けさせ給えり。

ろうやく

たも

によにんとう

しにん

だいぼさつ

されば、この良藥を持たん女人等をば、この四人の大菩薩、

ぜんごそう

た

添

によにん立

たま

だいぼさつ

前後左右に立ちそいて、この女人たたせ給えば、この大菩薩

も立たせ給う。乃至、この女人道を行く時は、この菩薩も道

いたも ないし

によにんみち

いとき

ぼさつ みち

を行き給う。譬えば、かげと身と、水と魚と、声とひびきと、

つき ひかり

しだいぼさつ

なんみようほうれんげきよう とな

月と光とのごとし。この四大菩薩、南無妙法蓮華經と唱え

によにん 離

たてまつる女人をはなるるならば、釈迦・多宝・十方分身の

しよぶつ ごかんき

ぼさつ

み こうむ

たも

だいば

諸仏の御勘氣をこの菩薩の身に蒙らせ給うべし。提婆より

つみふか

くぎやり

だいもうご

者

思

も罪深く、瞿伽利よりも大妄語のものたるべしとおぼしめ

よろこ

よろこ

なんみようほうれんげきよう

すべし。あら悦ばしや、あら悦ばしや。南無妙法蓮華經、

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華經。

にちれん

かおう

日蓮

花押